

日本小児看護学会 30 周年 “ひとこと”募集企画

先日発刊されたニュースレター第 57 号に掲載できなかったものも含め、皆様からいただいたひとことを掲載いたします。改めまして今回の企画にご参加・ご回答いただき感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

■小児看護学会に関する思い出について

学術集会を始め、さまざまな視点から小児看護学会に関する思い出が寄せられました。本学会での繋がりは、今後も大切にしていきたいと改めて感じた内容も記載されていました。

項目	ひとこと
学術集会のプログラム 尊敬する先生に関する 思い出	第 15 回、吉武香代子先生の講演終了時の鳴りやまない拍手です。吉武先生は、ご自身の臨床経験のリアルな場面に触れながら小児看護のマインドを豊かにお伝え下さり、会場全体が共感し温かい拍手に包まれました。
	吉武先生との出会いはいろいろな意味で学びになりました。理事の時に会則作成、地方会立ち上げ、優秀論文の選定、学会開催など様々なことに関わらせていただきました。71 歳になり、退会を考える年になりました。
	吉武香代子先生の教え子の一人であり、第 1 回から参加しました。会場は大学内の講義室だったと思います。学会が規模・質ともに発展していくことに立ち会い、学会の成長・発達を実感しています。
	吉武先生に誘っていただき入会しました。小児看護学の発展を学会を通して実感し学ばせてもらってきました。小児看護の仲間がたくさんいる、本当に貴重な大切な場です。
	特別支援学校で医療的ケアを必要とする子どもの安全性を保障する看護師の配置に関する政策提言のために議員会館、文部科学省、看護協会に伺い、その後看護師の配置が進んだ。
	静岡での開催で、隣のボードの先生がポスターを貼るのを手伝ってくださった。とても嬉しかったです。
	初めて学会に参加した時の懇親会で、初対面の他大学の先生に「あなたのところの研究はいつもユニークで興味深いものが多いですね」と声をかけられました。この出来事が今でも活動の原動力のひとつになっています。
千葉の学会で、志茂田景樹さんのご公演を聞いたのが印象的でした。	
臨床で働いているときの 思い出	臨床の中で働いていた時、看護にも学会があることを初めて知りました。恐る恐る初めて参加した第 26 回学術集会(東京都)で、臨床や教育の場で活躍する看護師達が楽しそうに生き生きと子どもや家族、看護教育について情報共有をしている姿がとても印象でした。この学会参加をきっかけに、自分の専門領域を小児看護と決めました。
	働き初めて間もない新人時代、毎日業務内容を覚えることに追われ、深く考える間もなくやらなければならない仕事を消化する日々でした。
	臨床 2 年目で初めて学会発表を経験したのが小児看護学会学術集会でしたので、その時から私にとって特別な学会です
	初めて参加して発表した時の緊張は、いつまで経っても忘れられない思い出です。
仲間との出会い	年に一度の学術集会で再開する仲間や新しい知見は思い出だらけです
	初参加から今年まで、毎年新しい知識と刺激を貰います。仲間と出会い・交流する機会にもなっています。
	他の施設の方とコミュニケーションがとれて楽しかったです。
	初めて参加した学術集会は 2018 年でちょうど猛暑に襲われていた時でした。一緒に行った学生さんと名古屋の名店 味仙で飲みながら、小児看護について話したことがいい思い出です。

項目	ひとこと
学生としての思い出	初めての学会は大学の卒業論文の発表でした。地元での開催ということもあり、ハードルが低かったように思います。今思えばすごいことをしたなと思います。
	大学院進学を決めたとき初めて学会に参加した。すべての演題が、私からは遠いところにあるキラキラした存在に感じ、自身がそこに辿り着ける気がしなかった。教育を担っている現在、あの感覚になることは少ないが、指導する立場だからこそ忘れてはいけないと思っている。
	大学院に入り、初めて参加した日沼先生大会長の学会でボランティアとして参加できたこと 修士課程に入学した年に学会に入会しました。震災後の神戸での学会でした。学会では、看護専門以外の分野での特別講演がとて印象に残りました。また、ルミナリ工を並んで見に行ったことも忘れられない思い出です。
	修士課程で行った研究を初めて発表した時のことを鮮明に覚えています。発表・質疑の練習を何度も行い、準備万端で臨みましたが、当日は緊張してうまく質問に答えることができませんでした。しかし、成果を発表できたことの達成感と、熱意を傾けてきた研究を多くの方に知っていただくことができたことへの喜びは今でも忘れません。
	"卒業研究のテーマを学会発表するために高知の地を訪れました。
	"学生の時に「小児看護研究会」に参加したことをうっすら覚えています。どこかの講義室か講堂でした。年々参加者が増え、演題も病院から地域へと広がり…と考えると、小児看護学の学問の発展と一緒に年を重ねてきたのだと感慨深いです。
	修士で仕上げた研究を発表して大変緊張した思い出があります。会場で発表している時に、指導教授が会場の後ろで聞いていて下さる姿が目に入り、ありがたかったし心強かったです。最後の方で首を傾げられていたのでドキドキしました。懐かしいです。
	学会の参加により様々な場所に行き、多くの人と交流できる貴重な機会。自己研鑽をしながら、おいしい食べ物と仲間と楽しい時間を過ごすことが、自分の糧になる。
運営としての思い出	"第17回の学術集会を長野県立こども病院看護部長が引き受けすることが決まり、その準備に奮闘したことを楽しく思い出します。三輪百合子は1年前から会長公演で使用する写真集めを行い、長野こどもらしい会長公演に仕上がりました。その内容と学会までの道のりをまとめたスライドショーを前夜祭の温泉宿で上演し、大いに盛り上がりました。
	新しもの好きの長野こどものスタッフはイベント会社を入れ、抄録や申し込みをオンライン登録としました。また、企業への宣伝も積極的に行いランチオンも行いました。初めてのことを沢山行いましたが、自由に行わせてくださった当時の日沼会長にはとても感謝しています。この経験は、私の人生で忘れることのできない思い出になりました。
	初めての学会は、運営の一員としてでした。紙上で知った方が目の前におられることに感動しました。また運営の時一緒に会場だった方に次の学会で声を掛けていただいたりして貴重な経験をさせていただきました。
学術集会を通じた意識の高まり	この学会に参加したのち、もっと研究について学ぶ必要があると感じた。
	研究発表した後にいただいた質疑等で、新たなつながりができたり、研究や実践への発展になることが一番の思い出です
	学術集会を通して、実践や教育、研究発表のみならず、参加者の方々の交流や場の雰囲気が好きで、いつも楽しく参加しています。そこから受けた刺激は仕事への活力になっています そんな中での学会参加は、看護とは、根拠に基づく実践、一番大切にしたい子どもと家族について、改めて考えることができる軌道修正の場でした。また、自ら学び深める姿勢を持った人たちの中で、熱意を持って小児看護と向き合う意識が高まりました。"
	日本小児看護学会には、大変お世話になっています。自分の進路を決めた学会でした。上記の学会に参加して、約20年ぶりに看護短大時代の恩師に偶然再会しました。そこで次年度開設する看護大学院修士にお誘いいただき、ご縁あって修士課程から博士後期課程へとご指導いただきました。恩師は退官されましたが、今年度博士を修了します。
	昔むかし、児童虐待の発表に対し質問者から孤児院（名称は変更していたにも拘らず）について小児看護として議論することは相応しくないとお叱りを受けたことが忘れられません。
そのほか	来年は是非会場で会いたいです。
	素晴らしい学会だと思います。
	子どもの未来を考える
	新たな道の第一歩

■今後の方向性と学会への要望や期待すること、今後の方向性について

COVID-19 関連情報を含め、小児看護学としてのエビデンス創出や今後の方向性への期待が寄せられました。オンラインでの取り組みには、継続希望が多い状況でした。また臨床看護への支援、社会への働きかけが求められていることが分かる結果でした。

項目	ひとこと
エビデンスの創出	多文化、多様性、ジェンダー視点など、学問の垣根を超えた小児看護学の挑戦
	看護研究は全国規模のネットワークに乏しいので、学会が主導する全国を股にかけた小児看護の研究グループがあってもよいかと思いました。
	臨床への還元を最大限に可能にする研究に対する探究
	臨床とアカデミックの結びつきを強く感じる学会です。このまま研究知見を臨床に還元していくことを大切にしたい、臨床家と研究者が作り上げる学会であってほしいと思います。
	産学連携（企業とのコラボ）で理論や概念の実装化を図る。
	学会誌への投稿論文の査読などを通して、いかにして研究の quality を向上するかが今後期待していることです。
COVID-19 関連情報	小児の病床数減少、病棟閉鎖などに伴い看護学実習は大変厳しい状況にあります。投稿していただいている論文の中に多くの施設を活用して実習されている報告がありますが、今後さらに厳しくなると思います。
	コロナウィルスに関連する、小児領域特有の課題、対策を打ち出していけるといいと思う。多くの会員がいるので、今後も今回の COVID-19 の様に、教育や臨床のことでの困りごとが少しでも解消できる情報を配信していただきたいです。
	コロナウィルスによる臨床への影響は計り知れません。コロナ禍の情報発信を強化してほしいです。
臨床看護への支援	学会発表までのデータはなくても臨床の場で行われている看護の工夫について情報交換できる場があると実践に役立てられると思います。例えば V ラインや CV の固定、退院指導、食事介助、感染対策など
	エビデンスを集めて、小児看護に関するガイドラインの作成をワーキンググループを作って、進めてほしい。
	小児看護を行っている現場の看護師にとってスキルアップに関する情報が得られるといい。今後も各施設や看護師養成所では対応しきれない課題に取り組んでほしい。
	いつも、新しいトピックスを取り上げていることも刺激になります。そのほか、分科会で課題に継続して取り組んでいることで、すぐ現場に活かせるきっかけになっています。
	小児看護領域の研究をより推進できるように、臨床や教育の場で研究に携わる看護師達にインタビューをしてほしい。臨床の看護師が研究に取り組むメリットを伝えてほしい。
	総合病院のなかでも、小児看護師としての専門性を発揮し続けられるよう、働きかけや知恵をいただきたいです。在宅の様々な施設で活躍する看護師の方々にも今まで以上に入会いただき、医療機関を含めてシームレスな情報共有ができる学会になってほしいです。
オンラインの継続希望	近年「テーマセッション」が増え、検討すべき課題の多さの表れだと思います。発表時間の重なりで参加できないので今回のようなオンライン参加を一部取り入れるなど新たな開催方法の導入を期待します。
	オンラインの方が参加しやすく、今後も学会参加に、地元以外だと現実的に難しい人用（出張費が出ない人、子持ちで外出が難しい人用）に開催してほしいです。
	小児看護がより良いものになるような講習会や研修の開催（オンライン含め）をして欲しいです。
	学会が主催するオンラインでの会員向けセミナーが、定期的で開催されることを期待します。会員同士がオンラインで交流できるようなサロンのようなものが開催されるとよいと思いました。研修や講演会といった真面目？なものではなく、何かのトピックについて語り合うようなラフな会があればよいと思います。

項目	ひとつこと
学会活性化の方策	小児看護は学生には大変、人気のある科目であり「小児科」希望の学生も沢山いるので小児看護を目指す学生も参加できるような学会になるといい。
	専門性を極めるためには、多職種が参加できる形式も取り入れるべきと考えます。会員がいれば非会員も発表資格が得られるようにしてほしいです。そうすれば、卒業研究など若い人たちが学会に参加しやすくなると思います。
	学会員になるのに他薦がいるのが少し面倒な気がします。会員を増やすことを第一に考えた方がいいと思います。また、役員にもっと現役の看護師を入れるべきだと思います。いつまでも同じ人やその中での推薦では広がらない気がします。
	学会サイトは新装されたが中身の更新は相変わらず遅い。活動成果や情報提供等、スピード感を持って実施してほしい。同じ人が複数の委員会委員となっている点は規制できないのか。
小児看護教育への支援	今後の小児看護学の臨地実習のあり方について、提案があるとうれしいです。
学術集会の方法	今後もオンラインを併用した学会にできると参加者も増えるのではないかと思います。学術集会のアンケートにも記載しましたが、口演もポスターも発表者による発表があったほうが良いと思いました。説明がないと質問もしづらいのではないのでしょうか。
	学術集会は通常開催できるようになっても、オンライン開催も併用でお願いいたします。
	いつも刺激を貰いますが、ワークショップなどがもっと増えたらなあと思います。
	抄録集はペーパーではなく、USBにして欲しいです。 小児看護を代表する学会であるという誇りをもって、他の学会に負けないように学術集会の内容を充実させていただきたいです。年々つまらなくなるという意見をよく聞くようになりました。うちも小児専門病院ですが参加者はかなり少ないです。
会員支援	研修やセミナーをたくさん企画してほしいです。
	ICTを活用した、会員に見える形で還元できる活動が必要、有償でも良いので実践相談や研究支援など、現場のアウトソースとして機能する。
	学術集会以外にも、学会員一人ひとりが学会に関わっているという実感を持てるようなイベントがあると良いと思う。
	学会員が学会に対する愛着をもっと持てるように、学会員同士の交流を活発にすべきだと思います。
	学会組織の活性化。
海外との連携	日本だけでなく、様々な海外の学会と連携しながら、子どもたちの健康支援につなげられることを望んでいます。
	海外の学会とも連携しながら、日本だけでなく、世界的な小児看護の動向を伝えてほしい。
	日本の良い小児看護や知見を、国内外の小児看護の方々とも共有したく、今後、英文論文の受理や英文誌の発刊も検討いただきたいです。
多職種連携の推進	多職種連携の場を設定して小中学校の教諭、養護教諭、などとのセッションが日本の小児看護分野で活発になると、子ども達の生きやすさを支援できるのではと思います。
	主に小児看護に携わる看護師が会員ですが、医師だけでなく、検査部門、リハビリなど、もっと幅広い多職種の方が参加してみたいと思える学会になったら良いのではないかと思います。
	診療報酬については、他職種との協働による意見書の提出をしているが、多職種との協働を進め、子どもと家族を取り巻く環境を整えるために政策提言をしていく必要があると思います。
小児看護の牽引	子どもの看護といえば、「日本小児看護学会」というように小児看護を牽引し続けて欲しい。
	小児看護は、特別なスキルを要すると思います。今後さらに混合病棟の中に小児科があったり、成人病棟に入院する小児が増えると予測されています。小児の専門病棟でないところの看護師のスキルアップをいかに図っていくかは、将来の小児看護に必須ではないかと思えます。

項目	ひとつこと
社会への働きかけ	少子化でますます軽視されがちな、こどもとその関係者のアドボケーターとしての立場を、社会的にも確立していったほしいと思っています。
	さまざまな子どもたちのことを、小児看護だけでなく、日本だけでなく、グローバルに考え、学会として発展されることを望んでいます。
	小児の人口が減っていますが、子どもたちは地球の未来を担う存在です。日本だけでなく地球規模で子どもたちの未来を考えていける組織なってほしいと思っています。
	社会情勢に合わせ、少子高齢社会の中でも子ども一人一人が安心して生活ができ、さまざまな経験を通して成長できる社会を作る一助が担えるよう発信してほしい。
	これからも時代の変化に敏感に対応し、こどもも、保護者も、きょうだいも、関連する多職種も、誰も取り残されない看護を創造していく場であることを期待しています。
	学会としての子どもやご家族への直接的メッセージ、アプローチがもっと増えればよいなど期待しています。
	育て中の母親や家族に提供できるような情報発信や情報共有ができる場となるといい。
	輪が広がり、子どもたちを支援するためのつながりができたらいいと思います。
	診療報酬の面でも小児の扱いは酷くて経営陣からお荷物扱いされている。小児を守らなければ未来はないということを強く発言してほしい。
	いつまでも子ども中心に考えられる学術集会であってほしい
	疾病や障がいをもった家族や本人達も、学会に参加できると良いのではないのでしょうか？
	小児科医とも連携し規模の小さな病棟でも小児医療が国からしっかり守られるようにしてほしい。適切な人員配置ができるようにもっとアピールしてほしい。
	もっと他の学会や社会に発信できればよいと思う
今よりも市民や他の学会との連携が深まることを期待しています。	

日本小児看護学会広報委員会 (public-relations-ml@jschn.or.jp)